

追悼 福井勝義先生

パイオニアの後に続くもの

— 福井勝義君を偲んで —

河合雅雄

昨年(2008年)4月18日、ナイル・エチオピア学会大会が弘前で開催されるので、福井夫妻と縄田浩志君と同道することになり、伊丹空港で待ち合わせた。福井君が倒れ、京大病院へ入院したと縄田君に聞いて動転した。詳細はよくわからないが、かなりよくないとの様子だった。心臓の手術をしたがその後調子はよいと聞いていたし、どんな困難の中からも立ち直る不死鳥のようなタフガイだから、きっと再起するだろうと沈んだ気分を振るいたせたが、暗い気持はぬぐいようもなく、弘前へ出発した。

しかし、会うこともかなわないままに、早々とあの世へ逝ってしまった。あれからもう一年もたつが、心の中にぽっかり開いた穴はそのまま、その中で愛惜の情が衰えもせずに渦巻いている。片腕をもがれた淋しさと脱力感とともに、停年後やりたいことが山ほどあったろうにと、彼の気持ちを察して無念さがこみあげてくるのである。

福井君との縁は、エチオピアで生まれた。1973年、私は大沢秀行、森梅代、岩本俊孝の3人と、エチオピアの北部セミアン高地でゲラダヒヒの研究を行った。その時福井君は正子夫人と共に、ボディ族の研究を行っていた。当時は海外調査も少なく、旅券も公用旅券だったし、大使館も大変親切で、よく面倒を見てもらった。出来場書記官(当時)には何かと親切にいただいたが、福井夫妻がボディ族の地でマラリヤとチフスに罹り、セスナを飛ばして救出したという話を聞いた。現地の警察署からの救援無線での知らせを受けて、セスナを飛ばしたが発見できなかった。大使に「教授だったらもう一度飛ばさなきゃいけないが、助手だ

ろう。費用も大変だから、打ち切れ」と言われた。地位で人間の価値規準を定めるいかにも官僚的な発言であきれるが、出来場さんは大変困ったという。しかし書記官は、大使の意見に反して個人の責任でもう一度救出の飛行機を飛ばした。それによって福井君は救われたのだが、出来場書記官の異例とも言える英断がなければ、どうなっていたかわからない。出来場さんは穏やかな人で、小さな声で静かに話されるので、耳をすまさないといけない時もある。出来場さんにはこにこしながら、福井君を救出した時の逸話を語ってくれた。普通なら一つでも致命的な病に二つもかかっていたら、痩せこけてはいるがけろっとした顔で、「ビーフを食べたいと言って、二枚もペロッと平らげたのには、びっくりしましたね」とにこやかに笑いながら「ああいう人だから、研究とは言え、とんでもない危険な地へ入れるんですね」と感にたえないふうだった。

福井君にはそれまで会ったことはなかったが、どういう人かは知っていた。これは今西山脈のいいところで、山と探検という共通の嗜好を持った仲間の会話の中で、個性的なおもしろい人はおのずと登場するからである。「若いやつらの中のおもしろいやつ」として、ときどき福井勝義の名があがっていた。こういう人間関係の情報ネットワークは、非常に重要な役目を果たしている。初めての出会いにもかかわらず、ずっと前から知り合っていたような感情のチャンネルができてあがっていて、出会ったとたんに関心度をこめた会話がはずむものだ。福井君との出会いも、そういうふうだった。

私たちの調査には、霊長研のランドクルーザーを持ってきていた。ボディの調査地に入るには、どうしても車が必要だ。福井君はこの時アジア・アフリカ言語文化研究所の助手だったので、私たちのランクルを霊長研からAA研に移管することにし、福井君に譲り渡すことになった。こうして、福井君のボディ族研究に、はからずもいささかの貢献をすることになったというわけである。

福井君の研究は焼畑から始まり、大変幅広いが、なんといっても最も大きな業績はボディ族の研究であろう。わが国の文化人類学の一つの金字塔と言ってもよい。その仕事にいたく感心していたので、研究会で話してもらうことにした。『創造の世界』という小学館から出ている季刊雑誌がある。これは湯川秀樹先生がノーベル賞を受賞されたのをきっかけに、日本人の創造性を涵養するために創られたものだが、健康を害されてから先生の御指名により、梅原猛、作田啓一と河合の3人が編集委員として継続することになった。大変贅沢な雑誌で、あるテーマで一人の演者に2時間ほど発表してもらい、その後上記3人とそのテーマにふさわしい3～4人に参加してもらい、2時間ほど討論する。その内容総てを記載するというスタイルである。1976年に福井君を招き、『創造の世界』25号に「牧畜社会における色と模様象徴的世界」と題して発表してもらい、「色と文化」のテーマで小シンポジウムを行った。大変評判がよかったので、1983年には、その45号で「生態と文化の共生」と題して発表してもらい、「家畜をめぐる社会」について小シンポジウムを持った。いずれのシンポジウムにも正子夫人が参加した。最初の時は弱冠35歳、おそらくこの雑誌全刊を通じて、最も若い発表者だったと思う。新鮮で独創的な内容は参加者に深い感銘を与えたが、それとともに、いかにも腰が座ったフィールド研究者としての自信にあふれた面構え、才気煥発だが親しみのある土俗的な素朴さを発散させていて、将来を担う大器を思わせて頼もしかった。

福井君は国際エチオピア学会の委員に選ばれ、1991年の第11回の委員会で1997年に日本で国際エチオピア学会を開くことが決議された。この国際学会の開催について福井君から相談があり、大会の会長になってほしいとの要望を受けた。い

きなり言われてもこの学会の知識もないし、そんな大役が務まるはずがない。一応断ってから「第一、97年まで生きてるかどうかわからんしな」と言った。私は本気だったが、彼ははずいぶんびっくりしたらしい。後々も苦笑いしながらこの話をよくしたものだ。冗談でなく私は本気だった。医者からは「君はポンコツ車だ」と断定されている身体、いつエンジンが止まるかわからない。このポンコツ車がいまだに生き残っていて、ウルトラ強力エンジンを備えた彼の方が、突然エンジン停止してしまったのだから、人のいのちのはかなさ、運命の不思議を思わずにはいられない。

日本ナイル・エチオピア学会の設立総会が1992年3月28日に開催され、私は会長に押された。国際エチオピア学会の開催母体づくりの意図を含め、すべてが福井総司令の戦略構想に基づくものであった。福井君の熱意と気迫に押されて、「生きてる間はやるか」と彼にエネルギーを補給されながら情熱の火を燃やすことになった。

学会当初の若い人たちの熱気を、なつかしく想い出す。学会誌は英文にし、英文と和文のニュースレターを出す……など、無謀とも言える企画が並んでいる。どう考えても300名に満たない会員数のマイナーな学会の予算なんて、てんで頭の中にはないらしい。情熱の暴走と擲擻したいが、考えてみれば、このマイナーな学会の存在理由と言えば、突きつめればすぐれた論文を掲載した英文学会誌を出すことにつきる。会長を引き受けた限りはできるだけことはやってみるか、と共英製鋼株式会社の高島浩一会長に資金援助をお願いすることにした。じつは頭が重かった。霊長類学会設立にあたって高島さんから多額の援助金を頂いた。その上また！ というのは安易だし、厚かましすぎるのではないかと。といて背に腹はかえられない。福井君、川床君と一緒に会社へ出かけた。

高島さんは偉丈夫である。しかもダンディだ。にこにこして迎えて下さった。事情を話し「どうしても英文誌を出したい。最初の3年間だけ、英文誌発行の資金を援助してほしい」と申し出た。本当は毎年英文誌発行費を援助してほしいだったが、あまりに厚かましい。3年援助していただければ、後はなんとか自力で頑張るといふ決意を示す必要があると考えたからである。

私が喋った後、福井君が唸々と熱弁をふるったが、じっくり話を聞いてから高島さんが口を開いた。「3年間というのは、ムリでしょうな。経済はどう変動するかわかりませんからね」思わず3人は硬直した。「やっぱりそうか」という思いが頭をよぎった。でも「最初の出発の時だけは面倒をみてやろう」という意味かもしれない、という淡い期待をかけたとき、高島さんが続けた。この不安定な経済状況では、3年後のことなんて誰も保証できない。いつ大不況が襲ってくるかもしれないから、3年間の援助という約束はできない。「だから」と言って、とんでもない言葉が口から飛び出した。「できる時にしてあげましょう。5000万円を寄附してあげましょう。これで若い人が国際的な活躍ができれば、本望ですよ」。

帰りに大阪駅で感激の乾盃をあげたビールがどんなにおいしかったか、想像していただけたと思う。その後1000万円の追加があり、弱小学会としては日本一豊かな基金を持つ学会となった。若い人たちには、どんどんすぐれた英文論文を発表してほしい。そのことが故高島浩一と福井勝義という学会の恩人に報いる最大の感謝の表明であると思う。この学会は会員数を多くすることはない。資金力の豊かな少数精鋭の軍団、それがナイル・エチオピア学会の特徴だと思う。

福井君の最大の功績のハイライトは、1997年の国際エチオピア学会の開催である。もちろん彼一人の功績ではなく、関係者一同の献身的な努力の結晶であるが、その中心人物としての働きは見事なものだった。とりわけ、福井勝義、栗本英世、重田真義の共編による3冊の浩瀚な報告書は、おそらくこの学会における空前絶後の記念碑的出版物になるだろう。

エチオピアにおける文化人類学の研究を精力的にこなし、多くの弟子を育てる一方で、学際研究も驚くほど活発に行った。『エコソフィア』の創刊と編集、生きもの文化誌学会の設立と初代会長就任、大学アーカイブズの促進等、まさに八面六臂の活躍ぶりには目を見張るものがあった。停年後もユニークな夢を織り込んだ新しい計画を、かかえきれないほどたくさん描いていたにちがいない。そして、焼畑から始まる膨大な研究を整理する楽しい仕事も待っていたことだろう。それらを残したままあの世へ逝ってしまった口惜しさは、一年たった今も少しも癒えない。改めて思う。残った者が新しい研究分野を開拓し、独創的な研究成果を発表していくこと、このことだけが、福井勝義という一人の傑出したパイオニアの死に報いる行為だということである。

(かわい・まさお／日本ナイル・エチオピア学会初代会長)